



《静物 XXI》2012年 鉛筆・紙

キュレーターズ・アイ

秋山 泉 展 「存在の響き」

2014年10月15日(水)～12月26日(金)

主 催／山梨県立美術館

会 場／ギャラリー・エコー(美術館エントランス) 観覧無料

開館時間／9:00～17:00 休館日／11月4、10、25日、12月1、8、15、22日

山梨県立美術館
Yamanashi Prefectural Museum of Art

秋山 泉 展

— 存在の響き —

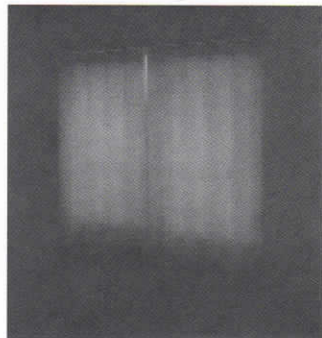
2014.10.15 (WED) - 12.26 (FRI)

トーンの調和の飽和点をみつける作業

私の絵はモチーフが少なくそれ以外は余白です。
余白にはモチーフの持っている存在感が満ちていると考えています。その存在感を画面の隅々まで行き渡らせるように表現するには、モチーフと背景のトーンがびたりと調和し、画面全体のトーンが飽和することが大切だと考えています。
私は自分の作品を音や音楽に例えて考える事が多いのですが、画面に表れるモチーフの存在感に対し、放たれた音が空間に響いてゆくようなイメージを持っています。
空間を満たす音のように、豊かな響きを持ったトーンの調和の飽和点を探して制作をしています。(秋山 泉)



《静物 IX》2013年 鉛筆・紙



《室内》2013年 鉛筆・紙

「光」に浸された空間

秋山泉は、紙に鉛筆という、ごくシンプルな画材で制作をしている作家である。描かれているモチーフも陶やガラスの器、蝋燭など身の回りにあるもの。それも画面の中に一つだけ、といったことが多い。小さな対象がポツンと置かれているような、単純な構成の静物画である。しかしその作品は、ゆっくりと時間をかけて対象に向き合い、繊細な線を丹念に積み重ねることで出来ている。周囲の空間に溶け込んでしまふようなほど、うすうすと、しかし確かな存在感を持つように、対象が描き出される。何らかの形を持った「もの」として、辛うじてその境を保ちながら空間の中に浮かび上がってくる。

こうした表現を可能にするため、少しずつ、何度も線が重ねられる。はじめは粗く、徐々に隙間を埋めるように線が密になっていく。ただ濃くしてしまうのではない。全体の明るさの調子をコントロールしながら、絵肌のキメを整えていく。鉛筆という画材の特徴を活かし、ごく薄く線の層が重ねられ、ほとんど筆致の見えない表面が出来上がる。

身近なモチーフを何十年も繰り返し描き続けたイタリアの画家ジョルジョ・モランディ(1890-1964)は、秋山が意識する画家だという。モランディは、何より静寂を希求し続けたとされ、埃をまとったビンや壺をアトリエの机に様々に配置して描いた。その制作の姿勢に加え、特に、モランディがアトリエに入る光の量をパネルを使って調整していたというエピソードに共感を覚えるという。作家としてのそ

略歴

1982 山梨県甲府市生まれ
2009 東京藝術大学大学院美術研究科絵画専攻 修了

個展

2009 「アートフェア東京2009 秋山泉展」小林画廊/東京国際フォーラム(東京)
「STILL LIFE-AKIYAMA IZUMI TCAF2009」小林画廊/東京美術倶楽部(東京)
2010 「Sound of Silence」小林画廊(東京)
2014 「ART STAGE SINGAPORE 2014」Marina Bay Sands(シンガポール)
「Izumi Akiyama -Harmony of Tone-」小林画廊(東京)

グループ展

2007 「秋山泉・北村真行 Exhibition」ART214(埼玉県比企郡小川町)
2008 「画廊の夜会」('09,'10,'11,'12,'13,'14)小林画廊(東京)
2009 「elements-秋山泉・玉利美里」高島屋東京店(東京)
「Xmas Art Festa -GIFT-」('10,'11,'12,'13)小林画廊(東京)
「Artistic Christmas Vol.Ⅲ」('10,'11)新宿高島屋(東京)
「美の予感2010」高島屋(東京・大阪・京都・神奈川・愛知)
2010 「アートフェア東京」('11,'12,'13,'14)小林画廊/東京国際フォーラム(東京)
「第8回前田寛治大賞展」高島屋東京店(東京)・倉吉博物館(鳥取)
「+PULS Tokyo Contemporary Art Fair」小林画廊/東京美術倶楽部(東京)
「第100回企画 鉛筆画の世界展」中京大学・Cスクウェア(愛知)
2011 「MITSUKOSHI ART FAIR」三越日本橋店(東京)
「三人展」小林画廊(東京)
「ART TAIPEI」('12,'13)小林画廊/Taipei World Trade Center(台北)
「KIAF」('12,'13)COEX(ソウル)
「東日本大震災復興チャリティ・アート展」東京美術倶楽部(東京)
2012 「ART SHOW BUSAN 2012」小林画廊/BEXCO(釜山)
「Art Award Next II」東京美術倶楽部(東京)
「SCENE 3」TIME&STYLE GALLERY/六本木ミッドタウン(東京)
2013 「MY STYLE, MY LIFE -トモニある日々-」新宿高島屋(東京)
「Beyond the Competition」小林画廊(東京)
「Seoul Art Fair」Lee C Gallery/COEX(ソウル)
「Imago Mundi(イマゴ・ムンディ)」Fondazione Querini Stampalia(ヴェネツィア)
「第19回 東美特別展」小林画廊/東京美術倶楽部(東京)
2014 「NIPPONISTA -Japanese Sense-」(ニューヨーク)
「Group Exhibition」Edwin's Gallery(インドネシア)

賞歴

2007 O氏記念賞
2012 Art Award Next II 審査員賞

出版物(挿絵)

2009 すずきじゅんいち/榊原るみ 著、絵本『東洋おじさんのカメラ』2009、小学館

パブリックコレクション

ベネトン財団

の感覚が示すとおり、秋山もまた光に対して非常に鋭敏であり、彼女の作品の本当の主題は光であると言える。

アトリエ内にモチーフを置き、外からの光をよく観察する。日々外光は変化するが、制作の過程で作品に定着させたいと思える「自分の光」を選び出していく。白い壺や皿をモチーフにした作品は、階調の幅が狭く、その微妙な差を描き出している。また、ガラスの器は、反射によって複数の光の粒が散りばめられている様子を捉えようとしている。あるいは暗闇の中に蝋燭の炎が輝く作品は、明暗の差を大きくすることで空間を照らし出す光をより強調して見せている。近年は窓辺も描いているが、これもまた外の光を通す窓と暗い室内が対比され、光がにじみ出す空間がテーマと言える。こうした秋山の表現に、緻密に明暗を表すことのできる鉛筆と紙という素材が最も合っているのだろう。

秋山にとって光とは、あらゆるものに等しく注がれるもの、であるという。全てに均等であるものに対し感覚を研ぎ澄ませることにより、身近で日常的な壺や器から彼女にとっての意味が引き出される。それは小さいながらも、細やかに自らの世界を紡いでいく営みである。そして私たちは、光に浸された彼女の作品から、光があつてこそ全ては「見える」という当たり前前のごとくに気づき、「見る」ということの本质に思いを巡らすことができる。

(山梨県立美術館学芸員 太田智子)

Access

中央自動車道甲府昭和インターチェンジより

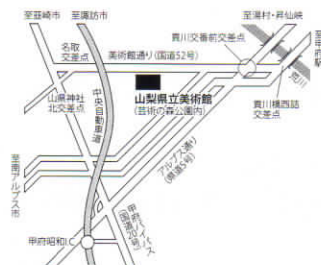
●料金所を昇仙峡・湯村方面へ出て、200m先を左折、徳行立体南交差点左折、アルプス通りを約2km直進、真川交番前交差点を左折、国道52号を約1km左側。

JR中央本線甲府駅より

●甲府駅バスターミナル(南口)6番乗り場から発車するすべてのバスで約15分、「県立美術館」下車。
●タクシーで約15分。(料金1,700円程度)

昇仙峡より

●敷島営業所行バスで「県立美術館」下車。



山梨県立美術館

Yamanashi Prefectural Museum of Art
甲府市買川1-4-27 〒400-0065 Tel. 055-228-3322 Fax. 055-228-3324
http://www.art-museum.pref.yamanashi.jp/